

守られている間に守る力を

2026・3・4 重枝 一郎

以前、校長講話で私が生徒に話した内容である。

「私がみなさんに言いたいのは、守ってもらうばかりではなく、守る側に回る経験もしてほしいのです。学校生活の中で、みなさんは全員守られる経験は必ずしていることになります。だから今のうちに、守る側になれるくらいの強さやたくましさを身に付ける経験もしてほしいと思うのです」

タイトルの「守られている間に守る力を」とは、周囲からの支援や、環境に恵まれている間に、将来の自分や他者を守る主体的な力を養うための成長を促す言葉として私は話している。「守られている間に守る力を」という言葉は、一言で言うと「主体的成長」と言える。庇護されている現状に甘んじず、感謝をもってチャレンジし、実力をつけることである。

先日、ゴールボールのチームが、大会5連覇を成し遂げた報告を職員朝礼で話した時に、「大会で優勝したりするのは“守られている間”であり、その経験を、誰かのために役立てることや、世の中に発信することは“守る力”である」と言ったのを覚えているか。生徒たちは、ゴールボールの取組を、はないちで探究し発表し、その後「中高生探究フォーラム」（後援：九州大学共創学部）でも発表する。また、県立福岡高等視覚特別支援学校の生徒さんとのつながりも作った。まさに、“守る力”であると思う。

実は、後で聞いたのだが、生徒たちは、上記の校長講話を意識してくれていた。もちろん、顧問の松原先生、はないちの森永先生の影響が大きい。

“守る力”は、AIで代替しづらい資質・能力になると思う。自分が手に入れた経験の素晴らしさを、自分のただの思い出にするのではなく、誰かのために使う。これは、その人の感性でもあり、その感性に対し、他者からプラスの評価をもらおうと「大切なひとり」の実感が得られると思う。そして、私の想像だが、たぶん生徒自身幸せを感じると思う。

このことにインスパイアされたのかもしれないが、昨日の卒業式の式辞で私は、「幸福の実現」について話してみようかと思った。ゴールボールも、幸福の実現においても、人とのつながりが不可欠であり、大前提として人は一人では生きていくことはできない。必ず、何らかの形で人とつながっている。

哲学者のアリストテレスは、人とのつながりを友愛という言葉で説明している。友愛には3種類あると。一つ目は、有用性に基づいた友愛、たとえば、試験の前にノートを貸してくれるとか、自分にとって役に立つ人のこと。2つ目は、快樂に基づいた友愛、自分にとって快いものを与えてくれる人のこと。この2つの友愛は「自分にとって」という自己中心的なものになる。相手に有用性や快よさを感じなくなると、友愛の情も消えてしまう。そこには、持続性はない。3つ目は、人柄の良さに基づいた友愛である。これをアリストテレスは真の友愛と呼んでいる。人柄は簡単には変わらないので、持続的であり、安定性がある。では、人柄の良さとは？ それは、これまでの毎日の積み重ねに基づく人格である。ただし、人柄に基づいた友愛が形成されるには、積み重ねなので、時間が少しかかる。自分自身も磨かねばならないし、また人柄を兼ね備えている人を探さなくてはならない。時間をかけて、正しい習慣の継続によって人格が完成される。実は、これが生徒の中高校生活という時間になる。生徒には、この中高校時代に育まれた、人柄のよさに基づく友愛をこれからも大切にしてほしい。